

# 再生産構造と農山村 —解体論を問い直す—

根津 基和（LEC 東京リーガルマインド大学）

## はじめに

本報告は、「解体論を問い直す」とした。本報告は、3つの視点からアプローチする。第一の視点は、農民層分解論における論争のなかで、「農業解体論」がいかに批判されたかを明確にする。第二に、解体たる理由は、単なる農民層分解ではなく、再生産構造論としての視角を重視しているのであり、再生産構造論を抜きに展開される解体論批判は批判としての有効性に疑問が生じる。第三に、農業解体論は再構成論である土地国有化論とセットであり、ソ連崩壊以後、こうした土地国有化論の有効性は否定されている。もともと、土地国有化論は大きな反発があったといわれるが、土地国有化をのべた側も漠然と論じられており、具体性に欠けたものになっている。また、確かに「解体である」と、分析の有効性を認める者は少なくない。しかし現在では、農家や林家は解体であり、それが必然であるから、日本の農林業を担えないとか、企業の論理を持ち込めという判断に繋がりがかねない。例えば、株式会社の農業参入などには大きな反発がある。報告者も懸念しているところであるが、解体したから何でもありという、いたずらな見解が生じる可能性が高い。経済界は解体をテコにして「企業による土地所有」を論ずるのである。本報告のみで言及しきることはそもそもできないことであるが、ソ連型社会主義を聖域化していた時代、いったい国有化することで農民にどのようなメリットがあると考えられていたのかについても、説明しておかなければならない。国有化が誤謬と判断された現在、過去に意図していた方向性は何であったかが説明されるべきだろう。農民が土地を奪われて、追い出されることに関しては、農民的経営が破綻してしまうことであれ、土地が国有化されることであれ、企業が土地を所有することであれ、結果は同じこととなろう。この点に関し、わずかではあるが、報告者なりの視点を示せたらと考える。おそらく、『日本資本主義分析』に還元すれば基本線はどこで、どこへ向かうかの具体的な羅針盤づくりが必要となろう。

## Ⅱ.分析視角

山田盛太郎『日本資本主義分析』は、再生産過程の把握を重視する。その延長線を描くとするならば、ケネー『経済表』→マルクス『資本論』第2巻→亜説:ローザ『資本蓄積論』→山田『分析』となり、戦後は媒介理論において補注「軍需品生産の場合—転化式(三)」が入る。これを基礎に、軍事的覇権国家を必然化し、その下で、型の編成・型の段階・型の分解となるという把握が可能なのではないか。分析はいたらずとも示唆はできよう。ここに軍需と地代の不純要素がかくされているのではないか。さらには、環境問題との関連も再生産構造と地代との問題に含まれてくる。

戦後農民層分解論に関する総括は様々な学会でなされ、さまざまな著作で紹介された。だが、保志恂『現代農業問題論究』の見解までは総括しきれなかった。保志は「農業解体」どころか「農村解体」としたのである。その意味をくみとる必要があるだろう。

補記：①なお、若干の分析表を提示しながら検討を試みる。

②余力があれば、経済学からみた林業経済学の配置関係、重要性について示唆する。

(連絡先：根津基和 ([motokazu\\_n@mail.goo.ne.jp](mailto:motokazu_n@mail.goo.ne.jp)))